

子育ては「心育て」

子どもの成長に「失敗」はつきもの。
親としてどのような気持ちで受けとめますか。



みごとな チューリップ

拓也さん（39歳）と

香奈さん（31歳）夫妻

は、最近、新しい町に

引っ越してきました。こ

れから、近所の人たちと

仲良くつきあいたいと思っ

ていたある日のことです。

「だいすけ大介。ママ、お隣にととなり回覧板を

届けに行くけれど、いっしょ

に行く？」

「うん、ぼくも行く！」

大介くん（3歳）は、にこにこ顔で

サッカーボールを持って香奈さんと玄関

を出ました。

お隣の家は、奥さんが大のガーデニン

グ好きで、家の前の柵にはたくさん

のランタナがかけられています。色鮮やか





pho. PACC

な花が、まるでお客さんを出迎^{でむか}えているようです。そんな花々に目をやりながら、玄関に向かおうとすると、左手に小さな花壇^{かだん}があり、奥さんが手入れをしていました。

「こんにちは。回覧板です」

「あつ、ありがとうございます」

香奈さんの声に気づいた奥さんが、手を止めて立ち上がりました。

「あら、ぼくもいつしよに来てくれたの？ 大介くんだったわね？」

「うん」

「まあ、きれいなチューリップ！ 色とりどりで、もうかなり咲^さいてきていますね」

「そうなの。毎年咲かせているのよ。でも今年のできが一番ね。ここまで育てるのは大変なの」

「そうでしょうね」

奥さんは、ほかにも見せたい珍^{めづら}しい花があるからと、香奈さんを庭の奥まで案内していきました。



とんでもない ことに……

香奈さんが奥さんとガーデニングの話をしていると、大介くんの叫ぶ声がありました。

「ああっ！」

香奈さんと奥さんが振り向くと、大介くんの蹴ったサッカーボールが花壇のチューリップを何本もなぎ倒して転がっていました。

香奈さんの視線の先には、今にも泣き出しそうな大介くんが立っていました。

「まあっ！」

奥さんは悲鳴をあげながらチューリップに近づくと、倒れたチューリップを、しゃがみこんで両手で起こそうとしまし

た。しかし、そのうちの何本かはすでに根元近くから折れてしまっているようでした。

「申しわけありません」

サッカーボールを拾いあげると、香奈さんはあわてて謝りましたが、奥さんは何も言ってくれません。

「ほら、大介も『ごめんなさい』は？」

「……」
大介くんは下を向いたまま、だまっています。目には涙がいつぱい溜まっています。

「大介、悪いことをしたら、ちゃんと『ごめんなさい』って言わなきゃだめじゃない！」

「……ごめんなさい」
大介くんの目から、涙が一気にあふれ





出しました。

「もう、この子ったら……」と香奈さん。

奥さんは、そんなようすを見て、ゆつくりと口を開きました。

「しようがないわね……」

香奈さんは、奥さんから親の自分が責

められているような感じがして、いたたまれない思いでいっぱいでした。

「本当に申しわけありませんでした」

香奈さんは、もう一度謝りました。そして大介くんの手を引いて家に戻りました。

家の玄関に入る前、香奈さんは大介くんに聞いたできました。

「大介、わざとじゃないよね？」

「ちがう。ボールで遊んでいるうちに、行っちゃったんだもん……」

そう言うと、大介くんは家の中に駆け込んでしまいました。

「大介ったら、引越し早々とんでもないことをしてくれたわ……」

香奈さんの心は、ますます沈んでいきました。

分かってもらえない

「ただいま！」

「お帰りなさい」

「大介はもう寝たのか」

「……ええ」

「いつもより早いんじゃないか？」

「ないか？」

「夕食もとらないで泣きながら寝ちゃったの」

「そうか。何かあったのか？」

「か？」

香奈さんは、食事をはじめた

拓也さんに夕方の出来事を話しました。

「大介ったら、とんでもないことをしてく

くれたわ。お隣の奥さんと気まぎらくなっ

てしまったって……。どうすればいいかし

ら？」

「そうだなあ。子どものやったことだ



し、わざとやったわけじゃないんだから、もう一度ちゃんと謝れば許してもらえるんじゃないか」
「そうね。やっぱり、明日もう一度謝ってくるわ」



「それにしても、たかがチューリップだろう」

「たかがチューリップって言うけれど、それはもう大事に育てているんだから。簡単には許してもらえないわよ」

「ふーん、そんなものかね。だいたいそんな大事なチューリップを外で作るほうが問題なんじゃないのか」

「そんなこと言ったって……。ねえ、真剣に考えてくれているの？」

「ああ……。だけど、ぼくだって疲れているんだから、また明日、話を聞くとにかく風呂に入るから」

拓也さんの言葉に、香奈さんはこれ以上話すのをやめました。でも、心の中では「分かつうとしてくれない」という気持ちがあくすぶっていました。



頭を下げる親の姿

昨日のことで拓也さんに
ちよつぴり不満を持っていた香
奈さんの気持ちだが、少し明るく
なりました。

翌日、香奈さんは郷里きょうりから届いた野菜
を持って、お隣に謝りに行きました。し
かし何度足を運んでも留守るすでした。

夜、拓也さんが帰ってきました。拓也
さんは口を開くなり、「きのうはいっしょ
に考えてやれなくてすまなかつた」と言
いました。

実は、拓也さんは自分なりに考えてみ
ようと、今日、帰りがけに隣の庭をのぞ
いて来たのです。そして花壇の手入れ
があまりに行き届いているのに驚きおどろ、た
かがチューリップツとは言えないわけ
が、やっと分かったのだと話しました。

夕食後、拓也さんは大介くんの失敗を
聞いて思い出したことがあると、次のよ
うな話を始めました。それは、拓也さん
が小学生のときのことでした。

*

田舎いなかに育った拓也さんは、五年生のあ
る日の放課後、学校の裏山で、友だちの
Aくんと草スキーをして遊んでいまし
た。二人は、運動が得意で、お互いにラ
イバル意識を持っていました。草スキー
を楽しんでいるうちに、どちらが先に下
まで滑すべれるか競走しようということに
なつたのです。

並んで滑っているうちに、Aくんのほうがスピードを出して拓也さんを追い越して行きそうになりました。

「このままじゃ、負けてしまう」

そう思った拓也さんは、思わずAくんを押してしまいました。Aくんはバランスを崩し、転んだまま下まで滑り落ちて



しまったのでした。泣きながら帰っていくAくんの後ろ姿を見ながら、拓也さんはうしろめたい気持ちでいっぱいになり、食事ものを通りました。

「幸い、ひざをすりむいただけで大したことにはならなかったけれど、その日の夜にAくんの家から電話があつてね。おやじとおふくろはぼくを連れて、すぐに謝りに行ったんだ。

『息子がとんでもないことをしてかまして、申しわけありません』

そう言つて、両親はぼくのために何度も頭を下げていた。親のそんな姿を見たのは初めてだった。胸が締めつけられるような感じだったことを今でも覚えているよ。きのう大介の話を聞いて、何だか昔のことを思い出してさ」

「へえー、そんなことがあったの」

「おやじから、卑怯ひきょうなまねはするなと、きつく叱なぐられたよ。もちろん、大介の場合には、わざとやったわけじゃないけれどね」

「そうね。でも相手にしてみたら、起こったことは同じですよものね」

「あのおきのおやじやおふくろは、どんな気持ちだったのかな？」

「自分の子どもの失敗で頭を下げ謝あやまるのよ。その場にいたたまれない気持ちだと思おもうわ」

「そうだろうね。ぼくもそういう立場になったらそう感じると思おもうよ。子どもの前で頭を下げるなんて、親おやとしちゃ、格かた好こうの悪いことだよ。だけど不思議なんだな」

「えっ？」



親としての責任

「不思議って、どういうこと？」

「うん。そんな親の姿を鮮明せんめいに思い出すくらい覚えているのに、ぼくは、そのことで親が格好悪いなんて思ったことは一度もないよ。むしろ尊敬そんけいしているし、感謝しているんだから」

「そう言われてみれば、私にもそんなこ



とがあつたわ。そうね、小学校三、四年生のころかしら。友だちの家に遊びに行つたとき、部屋の中をふざけて走り回っているうちに、花びんにぶつかって割わってしまったことがあつたわ。家に帰つた私を見て、いつもより元気がないと気づいた母は、事情じじょうが分かるとすぐに私を連れていっしょに謝りに行つてくれた……。

考えてみれば、あのときの母は今の私より若かつた。お母さん、尊敬しちゃうわ」

「いまごろ、何だよ。でも子どもが失敗したとき、親は親として責任せきにんをとる姿というものを子どもにも見せることが大切なのかもしれない」

「親としての責任ね……」

「そうなんだ。ぼくは、あのととき、おやじやおふくろが謝る姿を見て、胸が締めつけられる思いだったけれど、今になって振り返ってみると、親にこんなことさせちゃいけない」って思った原体験だったように思うんだ」

「原体験って？」

「うーん。ぼくの考え方のもとになった体験ということかな。そのあと中学生、高校生になって、悪友からタバコとか酒とかいろいろと誘われたけれど、いざというときに踏みとどまることができたのは、あのとときの親の姿が記憶にあっただらだと思う」

「なるほどね。謝ることって、今まではマイナスのイメージしかなかったけれど、子どものために頭を下げることは、

親として大事な場合もあるのね」

「自分の親がしてくれたように、ぼくたちも大介のために、親として頭を下げるようになったわけだ。そう考えると、ちよつとうれしい気もするな」

「言われてみれば、そうね。私は、今まで、自分が親として未熟だから責められていると思つて、そればかり気になっていたの。でも、親としてもつと大切なものがあるのね」

「親としては君もぼくも未熟だよ。でも、だれでも最初からベテランだったわけじゃないから」

「そうよね。まだまだ未熟な親ですから、よろしく」つていう気持ちで、頭を下げればいいのよね」

「そうそう、やつと君らしくなった」

子とのかかわりを大切に

次の日、香奈さんは大介くんを連れ、野菜を持ってお隣を訪ねました。

「昨日は、大切なお花を折ってしまい、本当に申し訳ありませんでした」

そうやって頭を下げ、野菜を差し出す香奈さんの心は、

昨日のように苦しくはありませんでした。子どものために頭を下げるのなら格好悪いなんて感じない、むしろすがすがしいような気持ちでした。

大介くんも香奈さんにうながされて「おばちゃん、ごめんなさい」と謝りました。

「……もういいんですよ。こちらこそ、ごめんなさいね。主人に話したら、花が大事なのか、ご近所が大事なのか」って叱られました」

奥さんも、これから先のことを考えて気にしていたのでした。香奈さんもほっとしました。





それから数日後。香奈さんは大介くんを連れて、近所のスーパーに歩いて買い物に出かけました。ところが帰り道、ふと大介くんを見ると、手に棒付きのキャンディーを握ったままでした。

「大介、何それ？」

聞くと、買ってもらおうと思つてつかんだまま忘れてしまったというのです。

一瞬、香奈さんは、〃大介つたら、困ったことをしてくれたわ〃と思いましたが、考え直して次のように言いました。

「大介。大介が悪い気持ちでキャンディーを持つてきたんじゃないことは分かっているよ。でもね、お店の物をだまつて持つてきたら、どうかな？」

「どろぼうになっちゃう」

「そうだね。ママもいっしょに謝るから、お店に返して謝つてこよう」

「うん」

〃子育てには困ったことがつきもの。でも、そのときそのときの子どもとのかかわりを大切にしていこう〃

これが香奈さんの心境でした。香奈さんと大介くんは、今来た道を再び戻っていききました。

共に学びながら育つ親子

親は最初から親だったのではありません。日々子どもと向き合っていく中で、子とともに学びながら親になっていきます。

親は子を育てますが、親も子によって親として成長するチャンスを与えられているといえるでしょう。親は子の失敗にねばり強くつきあい、そのつど、親としての自覚じかくと子とのきずなを深めていくことが大切です。

子育てを通して、親も子どもが育つ——まさに子育ては“親育て”“心育て”といえるのではないのでしょうか。

